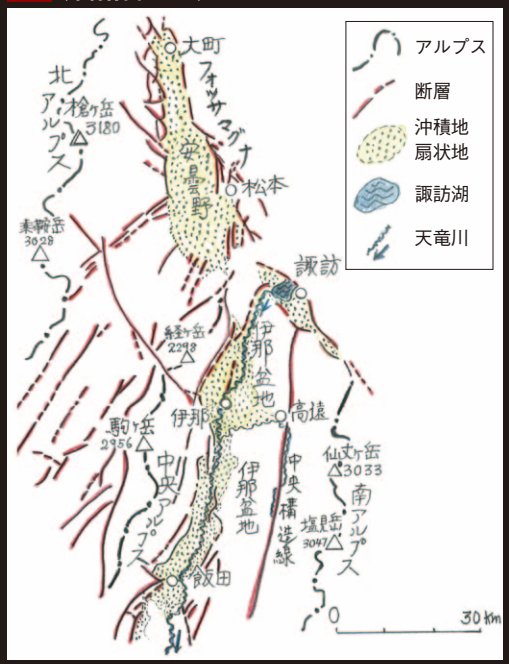
歴史探訪

斜面環境
山の辺の道「2」
中央自動車道と権兵衛街道

中村 三郎
なかむら さぶろう
防衛大学校名誉教授・理学博士

図-1 中央アルプス・南アルプス、伊那盆地周縁略図（中村作図2011）



（断層線は仁科他（1985）を利用した）

1 はしがき

「東仙丈　西駒ヶ岳　間を流るる天竜川……」とは、日本列島中部のフォッサマグナ南部、諏訪湖から流下し太平洋に注ぐ長大な天竜川の上流域において謡われている「伊那節」の一節であります。天竜川とその東西に位置する南アルプス･中央アルプスの位置関係を見事に表現してくれています。季節による変化、朝な夕なの景観と風情の変化も忘れがたく見事で、古来多くの人々にその状況が度々詠われています。作家臼井吉見は、「伊那の谷　すでに日暮れて仙丈は明るきままに雪映えにけり」と詠い、夕暮れの伊那盆地の優れた風情を彷彿とさせてくれます。

南北約80kmの細長いこの盆地は、両アルプスの隆起活動と断層・天竜川や支流の浸食作用で造りだされた盆地であり、大地のダイナミックな様相を感じさせてくれます。長い地球史の果ての今日、地域の人々は太古の昔より「山の辺の道」を行き来し、自然を本能的に評価して対応し、自然の掟をも素直に受け入れ行動しユニークな生活文化を築き上げてきました。しかし人と自然との関わりのなかで、時に「災害も自然」とも考えられる思いがけない現象にもしばしば遭遇し反省させられるこの頃であります。自然との共生を目論み、さらなる努力の必要を感じるこの頃であります。

2 えぐられた線路・水つき学校

南アルプス側から天竜川に合流する三峰川は頻繁に大氾濫を繰り返し、古来「暴れ天竜」の元凶ともいわれ怖れられていました。「長谷村誌」の記録によれば、1780年以来（それ以前の記録は不明）1955年までの記録では平均３年に一回の割合、多い時は一年に三回もの三峰川の氾濫も記録されています。小学生のころ、洪水の奔流と共に家も人も共に押し流される「川ながれ」という恐ろしい話も聞いていました（中村2010）。幼児期、私は祖母に連れられ今日のJR（当時伊那電鉄）下島という駅に居ました。この場所は天竜川と三峰川の合流するその先に位置していました。その時、駅から約600m東の堤防はすでに決壊し、駅東側の水田地帯には三峰川と合流した二河川の奔流が押

し寄せていたようであります。少し位置の高い駅のホームからその濁流のもの凄い様相を恐る恐る見ていたような気がします。しかしその直後「ア！ 危ない！」という叫びと同時に、祖母に抱きかかえられ駅舎の外へ放り出されるような状態で避難しました。立っていたホーム直下の線路が大きく崩壊したそうです。恐怖感が高じ気が動転して親戚に逃げ戻り、その後のことはあまり記憶していません。私にとってこれは初めての被災経験であり、その後河川や地盤災害の話を聞く時や現地等を見て歩くとき、この時のことが頭を過ぎります。

1959年（昭和34）、地域の人々が念願した美和ダムが当時の建設省（国交省）によって完成しました。その後今日まで三峰川地域における洪水・氾濫等の被災の記録はありません。古い時代から近世まで氾濫原であった下流域には素晴らしい環境も出現し、明るい理想的な居住域が展開し市役所も移転してきました。今日、前述の「川流れ」状況など想像もできません、また暴れ天竜の元凶としての三峰川の制御も実現しました。一方ダム上流の堆砂の問題は早くから指摘されていたため、今日いち早く対応が施されその効果と今後の経過が注目されています。

天竜川の中流域には1935年に泰阜（やすおか）ダム等がつくられ、ダム上流域における堆砂による河床の上昇が災害をもたらす問題とそれに対する対応は予てから取り沙汰されていました。泰阜ダム上流における鉄道･宅地･耕地・小学校等も被災が繰り返されていました。当時小学校の加籐明治先生が「水つき学校」というユーモアに富む童話を書いておられました。後年先生とお会いして話を伺った時、「洪水で学校が水に浸かった時思ったんだ､人間にはいろいろと生活のうえでの都合、自然にも予測できない部分があり、その因果関係は場所によって時代によっていろいろだねー……」などと呟いておられました。ダム構築後の上流域と下流域の環境の変化は一様ではありません。人の都合と自然の変化もさまざまで､加藤先生も苦悩しておられました。(「水つき学校」は後日児童文学賞をいただいたと聞きました)。

祖先は自然領域内生活から順次人間領域内生活を拡大し変遷もしてきました。ところが、さらなる人間の都合や目的のためにダム等が構築されましたが、ダム堆砂等の結果、上流ではダム構築以前の生活域の被災ということが問題になっています。しかし前述の三峰川における例については、コンクリートダム一つの構築によって、千数百年来の暴れ天竜の元凶も治まり、広域な氾濫域･合流域は別天地のごとき快適環境域に

写真-1 中央アルプスと伊那盆地（唐沢則夫氏撮影、2011・4）

隆起量の大きな中央アルプスの北縁、経ヶ岳山塊周縁の断層沿いの浸食はいちじるしく堆積も繰り返され、伊那盆地のなかでも最も広い平野（複合扇状地）をつくっています。天竜川東の萱野高原へ這い上がり、南アルプスを背に西南を展望すると、北から南に黒沢山(2126m)・経ヶ岳(2298m)・権兵衛峠をへてさらに南に将棋頭(2730m)そして南アルプスの主峰駒ヶ岳(2956m)を眺望できます。日本の屋根とも云われ3000m近い山々であるが、やわらかな山なみ、谷口集落の景観はなじみやすい。このような風情が伊那人（いなびと）の優しさや穏やかさを育むのであろうか　などという思いを抱かせます。夕映えに浮き出る山なみがいつまでも心に残ります。

変身しているわけで、自然との関わりのなかでは社会構造の変化によってはコンクリートも必要不可欠な場合もあります。人間の領域内生活が益々卓越してくる昨今、自然との共生を考えるとき、人と自然に関わる長い長い経過と当面の地域変化との関わりをどのように捉え対処すべきか大きな課題であります。

3
アルプスの隆起と伊那盆地 写真-1

最近の国土地理院の水準測量結果では、アルプスにおける隆起量は50年に30㎝という最大値が報告されています。この数値で計算するとアルプスは平均１年に６㎜ずつ隆起していることになります。日本の屋根とも云われ雁行する飛騨･木曽・赤石の三山脈とその北端は、糸魚川―静岡構造線を結ぶ大地溝帯（フォッサマグナ）によって切断されています。特に木曽山脈は地塁としての特長をそなえ、その長さは約90km幅数10kmの細長い山塊であります。伊那盆地は、木曽山脈と赤石山脈の断層運動を伴う隆起の間の地溝性盆地でもあります図-1。上流部から中流部にかけては隆起を続ける周縁山地から生産される多量の土砂による広い扇状の地形を形成し、近くの間歇的火山活動由来の火山灰･軽石なども交互に堆積､埋め立てられています。

3-1　高燥地の土地利用変貌

伊那盆地における扇状地の多くは天竜川の上・中流

図-2 伊那盆地　過去の桑園分布・西天竜水路・各種古道・中央道

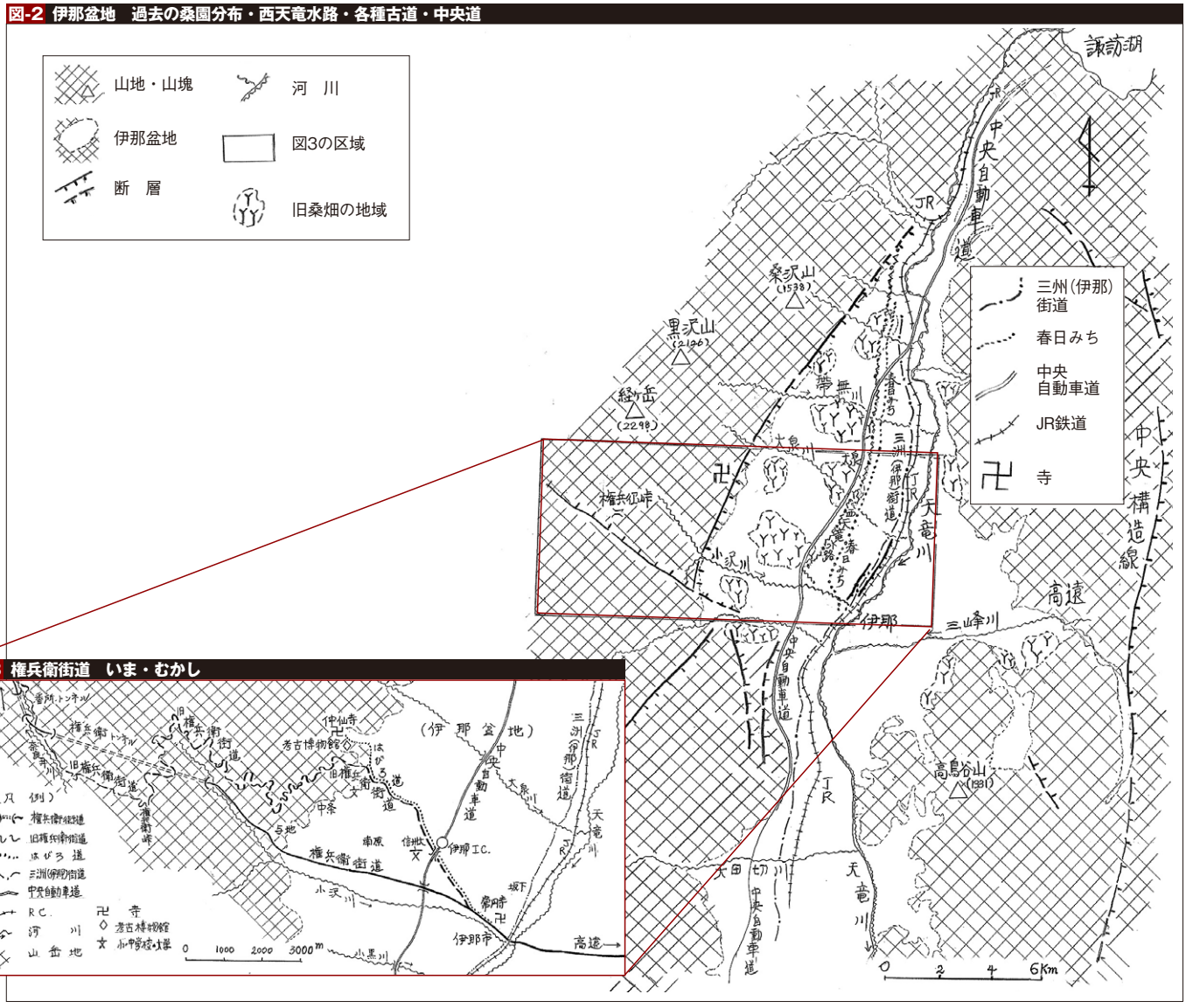


図-3 権兵衛街道　いま・むかし

部の右岸側に発達しており、前述の如く木曽山塊の隆起量が大きいため、浸食による土砂生産と堆積作用が著しく、大田切川･与田切川等は堆積物の押し出しがはげしく、天竜川を盆地の東側山塊へ押しやっているのではないかと考えたくなるような様相であります。山塊からの堆積物の厚さについて、小沢川の堆積面の一部と扇状地面のほぼ中央と考えられる南原付近における電気探査（農試S型による、1973）の測定結果の一例によると、基盤岩層上の堆積物の厚さは65～74m内外ということも確認されています（中村・小坂1973）。小沢川以北の扇状地面を流下する大泉川・帯無川等の中・下流部は、厚い堆積物の存在を反映し季節によっては末無川（水無川）となっています。しかし、扇状地中部の大泉のみは湧水に恵まれ局部的な水田と古い集落が認められます。経ヶ岳山塊直下の断層沿いの各扇状地扇頂部の湧水地付近には、わずかな湧水を求めてこの地方最古の集落と僅かな古い水田が拓かれています図-2。

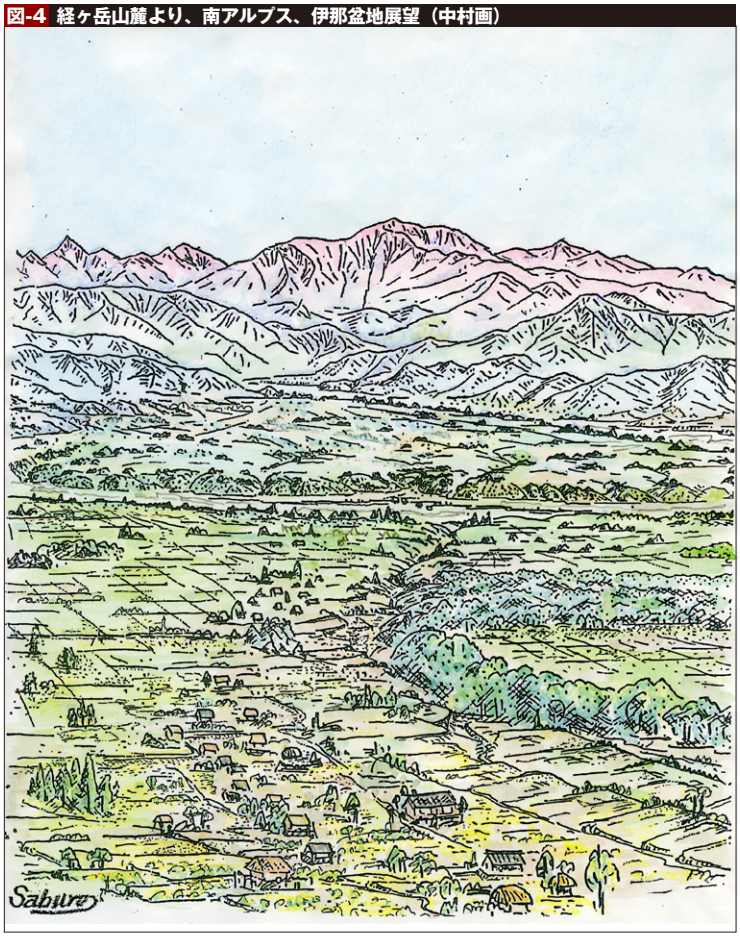
山麓複合扇状地からなる広大な地域の多くは高燥地で、古来水を得られないこの地域は、近世まで森林のまま放置されるか、かなりの面積が桑畑と農耕地として利用されていました。高燥地であることと気候条件も桑畑としては好適で、群馬県富岡と共にわが国生糸生産のメッカでもあった岡谷にも近いということもあり、養蚕の場としての条件もよく、この地域は明治以降わが国の経済を大きく支えた生糸産業の中心となり良質な繭の生産供給地でもありました。各地には繭の集散所も設置され、各所に製糸工場などが設けられていました。しかし、1945年、太平洋戦争終結後の経済活動の移り変わりは、従来の生糸産業にも大きな変化もたらしました。繊維産業の変化に伴う養蚕業の衰退と共に、当該地域における土地利用状況にも変化がみられました。桑畑の農耕地･牧草地化への転換、さらに最近は中央自動車道・大型農道の整備に伴い、扇央部は大規模な精密機器工場などの進出に伴う工場用地化への転換が顕著であります。この広大な高燥地は地の利・人の理をも得て、中央自動車道等を生かした近代産業の基地としても発展する可能性が大きく、再度　日本の近代産業の中心たる可能性を持っているものと期待されています。

一方、この高燥地における扇頂部とその周縁における風情は、日本においても屈指の優れた景観の場でもあります。信州大・大萱･羽広考古博物館・古刹仲仙寺写真-2,3等の教育施設や歴史的遺産を生かした観光と教育基地も整備されつつあり、わが国の「アメニティーの源流」に足る価値を十分に発揮し得る場でもあり、地域の人々の認識と意欲も強い。2009年に発足した「駒ヶ根高原フィールドミュージアム」に関わる一連の事業展開の過程（中島2011）においてもその意欲と成果の大きさが窺えます。

3-2　西天竜用水と「春日みち」

経ケ岳の山麓緩斜面はかなり広大な複合扇状地面でもあり、伊那盆地のなかでも最も広い平地でもあります。しかし大部分の地域は高燥地であったため、昔から地域の人々は水の取得を熱望していました。様々な苦難な経過と準備を経て「西天竜用水」の導入に成功しています。1922年（大正11年）に着工し1928年（昭

図-4 経ヶ岳山麓より、南アルプス、伊那盆地展望（中村画）



経ヶ岳山麓から東を眺めると雄大な仙丈ヶ岳に眼をうばわれます。夕映えの南アルプスと黄昏時の伊那盆地の柔らかな景観は、見飽きることなく時を忘れます。

和3年）３月に完成しています。この用水は盆地東を流下する天竜川にたいして「西天竜」と称しております。水路は広大な扇状地面の半ば東寄り、標高約750m付近の位置を選びつつ掘削し水路を構築しました。用水は岡谷市川岸において取水し辰野町･箕輪町･南箕輪村･伊那市小沢川に注ぐ約16㎞の距離であります。土地改良事務所の資料によれば、悲願の水路完成直後山林･原野等を開拓した結果、開田約1200町歩と記録されています。地域にとって西天竜水路の開通と高燥地における広大な水田地帯の出現は、関係する農耕民や地域経済にとって大きな恩恵をもたらすことになりました図-4。

水路や湧水は地域の人々の生活でありいのちであります。前述の西天竜水路はまさに地域の人々の生活に直結いたしました。この西天竜水路の東に沿うように（100～600mほど離れています）一本の農道がありました。水田の「田の代掻き」へ通った折り、滔々と流れる水路を恐る恐る覗き見しました（十分な柵などもなく危険で度々事故がありました）。この西天竜が沢山の水を運んでくれているその水をじっと見ていると、この農道を行き来する農民にとっては、有り難いことでありこの水は「いのち」でもあるなどと感じていたような気がします

この農道が「春日みち」（春日街道）ということは後で知りました。車を引っ張って行くには他の農道より幅があって通りやすいなーと思っていました。下中邦彦（1979）によれば、1601～'13年飯田城主の小笠原秀政が飯田から松本への転封に際して、飯田の天守閣を松本へ解体移動するための道路を、家老の春日淡路守に命じて従来の三州（伊那）街道より西に造らせたものでした。工事奉行であった春日淡路守の名前が付けられたそうであります。しかしこの「春日みち」は、伝承とその道筋が所々に残るのみで資料に欠け、幻の街道とも云われています。大泉を通る道筋は春日みちの一部のようでありますが、北方向の大出付近では道筋が判らなくなります。

今日、地域の大動脈「中央自動車道」は「西天竜水路」の西側をほぼ平行に走り、「春日みち」は水路の東側に構築されていた痕跡を見ることができます。いずれも南北方向にそれぞれほぼ等高線沿いに構築されています。古代の三洲（伊那）街道もさらに東側の扇状地末端か天竜川の段丘上に位置し，上記の各構造物共ほぼ平行に構築されている様子は興味深いことであります。

4
中央自動車道と権兵衛街道の「夜明け」

中央アルプスの西、木曽の谷は山々のど真ん中であります。木曽で生まれた文豪島崎藤村は、その名著書「夜明け前」の冒頭に「木曽路はすべて山の中である……」と述べています。たしかに木曽の谷の真ん中に立って見回すと平らな地形が全くありません。そんな地形条件でもあることから水稲栽培の場も少なく、木曽の地域は古来米が不足していました。

権兵衛峠（鍋掛峠）を通る小道は江戸時代初期（1660年代）木曽と箕輪や高遠とを結ぶ交通路となっていましたが、当時あまり使用されていませんでした。1680

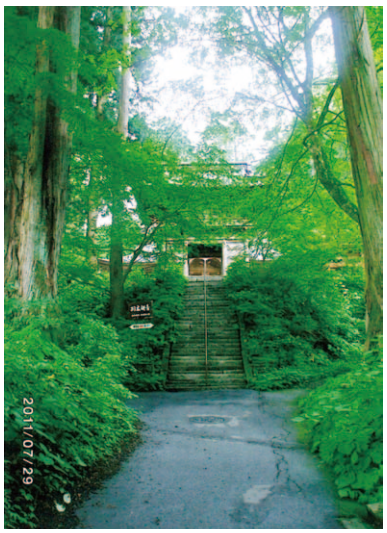


写真-2 経が岳山麓の仲仙寺
旧権兵衛街道沿いに位置する1200年の歴史ある古刹であり、伊那・諏訪第一番札所でもあり、羽広の観音様とも呼ばれて親しまれています。馬の安全祈願のため人と馬が共に参拝した信仰の道が「はびろみち」でもあり、そのまま権兵衛街道でもありました。

写真-3 はびろ道の石仏
伊那（坂下）の辻から仲仙寺に至る54丁の間には一丁毎に区切りをつける、石を刻んだ観音様が建てられ「石の仏の道」、「野の仏の道」とも呼ばれていました。ふっくらした頬・あどけなく優しさに満ちている観音様を見つめていると、心安らぐ思いであります。

年代、木曽神谷の牛方権兵衛は木曾側の宿の人々に再々呼びかけ、後に伊那側の人々の協力も得、苦難な努力の末1696年（元禄9年）７月に通行しやすい街道が開通しました。次の年（元禄10年）にはいち早く権兵衛峠を通り伊那盆地の米が木曽に送られたと云われています。工事に終始尽力した牛方権兵衛の名前が「権兵衛街道」という名称として名を留めています図-3。

伊那節には「木曽へ木曽へとつけ出す米は　伊那や高遠のお蔵米……」などと詠われていますが、当時伊那・高遠から年間、一万俵（一俵約60kg）とも云われる米が、木曽からは漆器や曲げ物などが運ばれたといわれています。なお、木曽谷にJR（中央西線）が開通した1911年（明治44年）以降は、峠越えの交流は衰退していました。さらに2006年（平成18年）２月には国交省と県の協力によって権兵衛トンネルが開通し注目されています。今日まで伊那盆地にとっては南北方向の道路とその活用・流通が卓越していましたが、東西方向の「権兵衛街道」、加えて伊那から木曽谷を連絡する権兵衛トンネルの開通（2006年）は、南北方向の「中央自動車道」の存在と共に、伊那盆地・木曽谷地域の経済・人々の交流・観光誘致等に計り知れない大きな影響を与え、木曽の谷にとっても「新しい夜明け」が期待されています。

5
「山の辺の道」とアメニテイー

今は昔「風か柳か勘太郎さんか　伊那は七谷糸ひく煙……」という流行歌がはやっていました。勘太郎さんというのは架空の話だそうですが、佐伯孝夫のこの詩の「七谷・糸ひく煙」という語句は、伊那盆地と周縁の山々や谷、谷口に流れるようにたなびく煙、生活する人々の息吹と山野の風情がよく表現されているものだなーと思いつつ唄を聞いていました。

この地方の各地の道は人の行き来につれて自然に出来た道であろうか、あるいは切り拓かれた道だろうか。道は地域の人々・訪れる人々の生活であり歴史でもあります。その結果が当地域では古代の三洲（伊那）街道、中世の「春日みち」（街道）、今日の中央自動車道が整備されてきましたが、これらに直交する東西方向の権兵衛街道がトンネルを備え再整備されました。いずれも古代から現代にいたる「山の辺の道」でもあり、そして各時代、地域にとっては大切な役割を果たしてきました。道を活用する目的は、塩で代表される物流の道であり、信仰の道、戦いの道などが考えられます。馬の背に乗せ、木曽へ木曽へとつけ出すお米、秋葉詣で・お諏訪詣り・善光寺詣で・武田信玄と織田信長の攻防、そして天竜川の通船（堀内1977）など、記録を見たり古い話を聞いたりしてきました。これも地域の構造地形や河の流れなどの影響が大きく反映しているのではということが十分考えられます。

中央構造線沿いに高遠町（伊那市）という古い城下町があります図-2。権兵衛街道の始点でもあります。1547年（天文16年）武田信玄によって構築されたといわれる高遠城、その城下町として700余年伊那谷の政治・文化の中心として栄えてきました。古い町並み等、昔ながらのただずまいを今もなお残しています。田山花袋はこの町を訪れた折りこんな詩を残しました。

「たかとほは　山裾のまち　古きまち　ゆきあふ子等の　うつくしき町」（原文）

町には必要以上大きな看板もなく雑音もなく、町の人々のつましさをも感じさせてくれるような雰囲気があります。茶店でほうばった名物「高遠まんじゅう」の味が、さらに「古きまち・うつくしき町」の歴史をじっくりと感じさせてくれました。

謝辞　本小文作成にあたり、国交省天竜川上流河川事務所 中島一郎氏のご支援をいただき、また長野県伊那建設事務所 唐沢則夫氏からは、中央アルプスと伊那盆地の素晴らしいパノラマ写真写真-1のご提供をいただきましたことを深謝いたします。なお長野県砂防ボランテア協会顧問唐沢行雄氏から種々ご助言をいただきました。皆々様に厚く御礼申しあげます。

参考・引用文献

★ 仁科良夫・松島信幸・赤羽貞幸・小坂共栄（1985）；長野県の活断層、活断層分布図と資料、信州大学理学部紀要、20-2
★ 長谷村誌刊行委員会（1997）；長谷村誌、第三巻歴史遍、長谷村教育委員会
★ 中村三郎（2010）；川ながれ・人取り川、「砂防と治水」、第193号
★ 中村三郎・小坂俊道（1973）；長野県南原地籍における扇状地堆積物の厚さと地下水賦存の可能性について、斜面環境企画 報告.2
★ 中島一郎他（2011）；砂防事業と地域活動の連携による青空博物館の取り組み、砂防学会研究発表会概要集、砂防学会
★ 下中邦彦（1979）；長野県の地名、日本歴史地名大系、平凡社
★ 若林 博（1972）；中央自動車道と伊那谷、伊那路、Vol16、No.10
★ 小林一行（1964）；経ヶ岳、「伊那路」、89号、第8巻
★ 高木俊輔編（2003）；伊那木曽谷と塩の道、吉川弘文館
★ 堀口貞幸（1977）；天竜川通船文政一件（1）、天竜川特集、伊那路
★ 中村三郎（2007）；信濃の七谷、天竜川上流直轄砂防70周年記念講演会論集